

ニュージャージー日本人学校における校外学習の取り組みについて

前ニュージャージー日本人学校 教諭

岡山県備前市立伊里中学校 教諭 早川 政宏

キーワード：在外教育施設、ニュージャージー日本人学校、校外学習、キャリア教育、本物に触れる

1. はじめに

平成25年（2013年）から3年間、アメリカ東部にあるニュージャージー日本人学校で勤務させていただいた。研修会等を通して、在外教育施設での勤務は貴重な研修の機会であることや日本以上に過密な勤務であることを知ることができた。在外教育施設での勤務を振り返ってみると、この2点は表裏一体であり、私にとって何ものにも代えがたい財産となった。ニュージャージー日本人学校には、高い教育効果が期待できる学校行事が数多くある。その中でも、中等部における校外学習はニュージャージー日本人学校の大きな特色となっており、生徒及び保護者が楽しみにしている学校行事である。本稿では、ニュージャージー日本人学校中等部における校外学習の取り組みについて、その概要を報告したい。

2. 北米地域における就学について

総務省「海外子女に対する教育の推進」（平成27年8月21日）によると、北米における海外子女数は約24,000名で、45%が現地校等に、53%が補習授業校に、そして、2%が日本人学校に就学している。英語圏であるため英語習得のため現地校等へ就学させる家庭が多く、88校の補習授業校に対して、日本人学校は僅か4校（ニューヨーク日本人学校、ニュージャージー日本人学校、シカゴ日本人学校、グアム日本人学校）である。

マンハッタンを中心としたニュージャージー州、ニューヨーク州、コネチカット州の3州はトライステートと呼ばれ、約100,000名以上の日本人が住んでいる。海外子女数は約3,000名である。ニューヨーク日本人教育審議会はハドソン川を境として、ニュージャージー州側にニュージャージー日本人学校、ニュージャージー補習授業校、ニューヨーク州側にニューヨーク日本人学校、ニューヨーク補習授業校の4校を運営している。

3. ニュージャージー日本人学校について

ニュージャージー日本人学校はニューヨーク日本人学校の分校として開校し、今年度25周年を迎えた小中一貫校である。児童生徒数は初等部25名、中等部28名の合計53名である（平成27年11月9日現在）。校舎はニュージャージー州バーゲン郡オークランド市にあり、閑静な住宅地の中にある。富裕層が多く住み、自然豊かな環境の中で学習や運動に取り組んでいる。教職員の内訳は文部科学省派遣教員（以下、派遣教員と略す）が10名、現地採用日本人講師が3名、現地採用米人講師が6名、スクールナースが2名、事務職員が2名、合計23名である（平成27年11月9日現在）。北米にある他の日本人学校と同様に、児童生徒数は減少傾向にあり、私の勤務3年目であった平成27年度は派遣教員が1名減となり、初等部3・4年生が複式学級となった。児童生徒数を増加させることも派遣教員の大きな使命であり、魅力ある学校づくりに尽力している。少人数の小中一貫校の良さを活かし、経験豊かな派遣教員による「きめ細やかな指導と専門性の高い指導」、優秀な米人講師による「ハイレベルな英語教育」、豊かな情操を育む「異学年割りグループ活動」の3つを核にして、質の高い教育活動を展開している。学校行事の多くは異学年縦割りグループで活動しており、1年生と9年生と一緒に活動する姿はたいへん微笑ましく、豊かな心の育成の一助となっている。

4. 本物に触れる校外学習について

(1) 目的について

ニュージャージー日本人学校中等部では、毎年1学期に宿泊を伴う校外学習を実施している。総合的な学習の時間や英語の授業を活用し、事前学習や当日の活動、そして、事後の振り返り等に取り組んでいる。総合的な学習の時間では、全体テーマを「先人に学ぶ、仲間に学ぶ」とし、学年テーマとして、7年生は「よりよい自分になるために」、8年生は「社会貢献できる人間になるために」、9年生は「よりよき未来を拓くために」を掲げている。私が中等部長を務め実施した平成26年度の校外学習の目的を次に示す。

- ① 7年生の総合的な学習のテーマ「先人に学ぶ、仲間に学ぶ—よりよい自分になるために」をうけ、ワシントンD.C.での自主研修やプリンストン大学での先人からの話を通じ、自身の生き方について考えさせる。
- ② 8年生の総合的な学習のテーマ「先人に学ぶ、仲間に学ぶ—社会貢献できる人間になるために」をうけ、ワシントンD.C.での自主研修やプリンストン大学での先人からの話を通じ、社会に貢献する意義について考えさせる。
- ③ 9年生の総合的な学習のテーマ「先人に学ぶ、仲間に学ぶ—よりよき未来を拓くために」をうけ、ワシントンD.C.での自主研修やプリンストン大学での先人からの話を通じ、自らの未来を拓くヒントを見つけさせる。
- ④ 事前学習、班別活動を通して、主体的行動力、コミュニケーション能力、追究力の育成を図る。
- ⑤ 7年生、8年生、9年生が協力して学習や活動を行うことで、異学年と交流し、協調性をもって仲間と関わる力を身につけさせる。また、仲間と協力する活動を通して、互いの良さを認め合う機会とさせる。
- ⑥ 平素と異なる生活環境の中で見聞を広め、異なる文化などに親しませ、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができる活動をさせる。
- ⑦ 学習した内容をレポートにまとめることを通して、表現力を身につけさせる。

(2) 活動内容について

宿泊を伴う校外学習（宿泊研修）を実施している中学校は多いが、毎年活動内容を見直し、全学年で取り組んでいる中学校は日本でも少ないのではないだろうか。平成25年度は1泊2日、平成26・27年度は2泊3日で実施した。以下が私に関わった3年間の活動内容である。

実施年度	生徒の活動内容
平成25年度	・ ニューヨーク市内の班別自主研修（セントラルパーク・自然史博物館・イントレピッド海上航空宇宙博物館等） ・ ユニクロUSAでの職業人講話（場所：マンハッタン5番街ユニクロ） ・ ラトガス大学 五島先生による講義（場所：ラトガス大学）
平成26年度	・ ワシントンD.C.の班別自主研修（ホワイトハウス・連邦議会議事堂・リンカーン記念館・スミソニアン博物館美術館群等） ・ プリンストン大学 小野先生による講義（場所：プリンストン大学）
平成27年度	・ ペンシルベニア州での自然体験活動（サイクリング・野外炊事・トレッキング等） ・ プリンストン大学 真鍋先生による講義（場所：プリンストン大学）

(3) 安全面での配慮について

ニュージャージー日本人学校のあるオークランド市はもちろんのこと、児童生徒、そして、派遣教員は防犯上安全な場所を選んで生活している。しかし、ニュージャージー日本人学校から自動車で約20分間走ったところに、

日本人がよく利用するショッピングモールがある。平成25年11月4日、そのショッピングモールにおいて、拳銃を持った犯人が立てこもり、駆けつけた警官に射殺されるという事件が発生した。派遣1年目であった私にとって、アメリカは銃社会であることの再確認と、高い危機管理意識の必要性を痛感させられた事件であった。いうまでもなく校外学習は校外で活動し宿泊する学習である。実際の現地研修を通して、事前学習の確認や新たな気づきが得られる教育効果の高い教育活動である。実施に至るまで、中等部派遣教員3名は時間をかけて実施計画等を作成し、研修場所や移動手段、そして、宿泊場所の確保を行う。派遣教員1名が自家用車を運転し、実際の行程をたどり下見を行う。トイレ休憩等で利用するサービスエリアには実際に立ち寄り、周辺の雰囲気や危険箇所の確認を行う。トイレでは個室の確認までも行う。安全面には最大の注意を払う。中等部保護者全員を対象にした事前説明会を実施することで、校外学習への理解と協力をお願いしている。

(4) キャリア教育の一環として

校外学習では「異学年縦割りグループによる班別自主研修」と「大学での講義」を主な活動内容としている。アメリカ東部にはハーバード大学をはじめとする世界屈指の名門大学（アイビー・リーグ）がある。ニュージャージー州には前記アイビー・リーグの1つであるプリンストン大学や、江戸時代末期にアメリカへの初めての日本人留学生を受け入れたラトガース大学があり、「大学での講義」を実施するにはたいへん恵まれた環境にある。アメリカで活躍する日本人研究者からは最先端の研究についての講義を受けるだけではなく、これまでのキャリア（中学生時代のことや研究の場としてアメリカを選択した理由）や生徒たちへのメッセージを伝えてもらっている。



プリンストン大学での講義の様子

中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月31日）ではキャリア教育で育成すべき力として、[基礎的・汎用的能力]が示された。[基礎的・汎用的能力]は、[人間関係形成・社会形成能力] [自己理解・自己管理能力] [課題対応能力] [キャリアプランニング能力]の4つの能力によって構成されており、「大学での講義」は[キャリアプランニング能力]の伸長に大きな貢献をしている。

(5) 生徒及び保護者のニーズについて

校外学習実施後には生徒及び保護者に対してアンケートを行い、今年度を総括するとともに次年度へ向けての改善を行う。ニュージャージー日本人学校では教育活動全般において、PDCA（plan-do-check-act）サイクルを意識した取り組みを行っている。

班別自主研修は2年連続でニューヨークやワシントンD.C.といった大都市で実施し、大きな成果を上げることができた。しかし、これらの大都市は家族旅行等で訪れたことのある生徒が多く、新鮮みの面で課題が残った。アンケートによると、渡米後にキャンプや野外炊事等のアウトドアの体験が少ないことが分かった。アメリカはアウトドア天国といわれているが、アメリカに住む日本人にとってはアウトドアが身近でないことが明確になった。このことは盲点であった。したがって、平成27年度はペンシルベニア州での自然体験活動を計画し実施することにした。派遣教員の中にも安全面での反対意見もあったが、例年以上に緻密な計画を作成し実施した。アメリカには「どの子も置き去りにしない法（No Child Left Behind Act）」があり、ニュージャージー州においては高校生未満の子供だけの外出は禁止されており、中学生でも保護者（大人）が同伴しなければ買い物にさえ出かけることはできない。生徒たちは大自然での班別自主研修を通して、普段の生活では味わえない貴重な経験と学習を行うことができた。

(6) 本物に触れることについて

ニュージャージー日本人学校から自動車を約40分間走らせるとニューヨーク市マンハッタンに到着することができる。ワシントンD.C.までは約5時間、ペンシルベニア州までは約1時間である。ニュージャージー日本人学校の良さの1つに立地がある。初等部6年生は社会科の授業で国際連合について学習した後、実際の国際連合本部を訪問する。中等部が校外学習で訪れた場所には、本物があり、本物に触れることができる。セントラルパーク、自然史博物館、ホワイトハウス、スミソニアン博物館美術館群、ポコノマウンテンなど枚挙にいとまがない。日本では紙面や画面上でしか触れることができない場所を実際に訪問し、現地研修できることの教育的効果は計り知れないものがある。



リンカーンメモリアルでの研修の様子

5. おわりに

9年生の生徒たちと個別に面談する機会があり、一人ひとりに将来の夢について尋ねてみた。私の経験上、日本の中学校3年生に同じ質問をしてみると、「まだ決まっていない」、「とりあえず普通科高校へ」、「高校3年間で決めたい」との回答が圧倒的に多かった。私自身、「発達段階からすると、そんなものだろう。私自身がそうであったように」と半ば決めつけていたところがあった。しかし、9年生からは、PKO (Peacekeeping Operation) 職員、航空会社、編集者、研究者、獣医師、起業家、弁護士、経済関係、小説家、国際会計士、舞台女優、といった回答が得られた。9年生全員が自分の興味や関心、そして、自己の適性と真剣に向き合い、将来の自分の姿を明確に思い描いていることに対してたいへん驚かされた。このことは、ニュージャージー日本人学校における校外学習等の学校行事が非常に教育効果の高い学習活動であり、これらを通して子供たちは生きる力を身につけていることを意味している。

ニュージャージー日本人学校での勤務は2年間から3年間である。毎年同じ教育活動を継続しても、それなりの成果は得られるだろう。しかし、少人数の小中一貫校の良さを活かし、「現地校ではなく日本人学校を選択してくれた子供や保護者のために、高い教育を提供したい」という派遣教員の思いが大きな原動力となり、改善と工夫を重ねながら校外学習等の学校行事を実施している。在外教育施設での勤務は貴重な研修となり、日本以上に過密な勤務であった。そして、何ものにも代えがたい財産となった。ニュージャージー日本人学校の勤務で研修したことを、どのような形で日本の子供たちに還元していくかが、今後の課題である。